



児童文学私考

酒井朝彦

去る五月六日午前二時、児童文学の世界に新しい道をひらいた小川未明氏が、脳出血のためにたおれ、昏睡のまま、療養のかいなくして、ついに十一日夕七時、七十九歳をもってその光輝ある生涯をおわられた。まことに痛惜のきわみである。十三日正午から葬儀がいとなまれ、天皇陛下より故人生前の児童文学にたいする業績により祭葬料を下賜され、ご遺族をはじめ私ども一同は感泣したことであった。

未明先生は日本のアンデルセンとまでいわれた童話文学の創設者で、昭和二十六年「未明童話全集」前期五巻が刊行されるや芸術院賞をうけ、つづいて昭和二十七年に同全集の後期七巻がはじめ、昭和二十八年に文化功労者にえらばれ、芸術院会員におされたのであった。が、この栄誉はむしろ当然のことで、これをほかの芸術の分野におけるおおくの功績者に文化勲章を授与されていることをおもうとき、なにか感無きをえないのである。したがって、一八

七五年八月四日、アンデルセンが永遠の眠りにつくや、葬儀の日、デンマーク全国民は業をやすんで喪にふくし、国王、皇后、皇太子、王子が、したしく葬儀に列せられ、この偉大な文学者の死をいたみ、さいごの感謝と訣別とをささげようとする市民のむねは街にあふれていたのであった。しかし、これは、国民性と、一国文化にたいする認識と慣習のちがいにともづくことによるもので、私はこれをとやかくいうものではないが、戦後、文化国家の樹立をとなえ、次代国民の文教がわが国の将来を左右する意義をおもいうとき、いろいろかんがえさせられるものがある。

とはいえ、未明先生の葬儀は清楚で、厳粛で、いかにも先生の人格にふさわしいものであった。告別に参するものも、ことごとく故人の業績と人間性に敬愛の情をふかくこめて、その霊前にかかげられた温容あふるる遺影にさいごの別れをおしまれた。これ以上、なにをもとむるものがあるか。先生の霊は、さぞかしまんぞくであ

ったこととおもう。未明童話の精神と文勲は永遠にかがやき、過去幾千万のおさなき児童の魂をはぐくんだとおなじく、これからもなおおおくの児童の心に愛と美と正義の審理をつちかいつづけることであろう。私どもは先生の童話文学の精神を表象し、確立するために、すぐる昭和三十三年に未明文学賞を設け、先生の誕生日なる四月七日にこれを授与することとして、ことしでその第四回をけみするにいたった。あたかも一カ月まえにその授賞式をおこなったばかりなのに、はや先生の魂魄たまはな浄土におもむかれたのである。靈棺を堀之内火葬場におくり、つかのまにして荼毗たひにふせられた先生の白骨を、坪田譲治君とはしではさみ合せてひろったとき、感きわまり、腕になみだをぐっとのみこむのだった。おりしも、西にかたむいた初夏の夕陽がその残照を白いなきがらにふりそそいでいた。

そのあと、私はひそかに坪田君にささやいた。

「ここに人生があるね。しかも、永遠の人生が——」

耳のとおい坪田君には、それが聞えたか、どうか、彼はしずかにうなずいてみせるばかりであった。小川先生愛弟子の坪田君の眼もなみだにくもっていた。

——人間はいかに生くべきか。

これを、身をもって、ながく私たちにしめされたのは小川先生である。

若葉の新緑も、いつしかふかくなった。私はいま、未明先生の死をみつめながら、じぶんがたどってきた文学修業の道をふりかえつ

てみるのであった。それは五十年のむかしをおもわなければならぬ。信濃の木曾の山中で少年時代をすごした私は、明治四十三年十五歳で上京し中学にはいったが、その年に未明先生はさいしよの童話集「赤い船」を世におくられている。それは先生二十八歳のこと。それより三年まえに第一短篇集「愁人」が出版され、さらに二年ののち「魯鈍な猫」が読売新聞に連載、ネオ・ロマンチズムの旗色をかかげて自然主義の文学に対抗された。が、その生活の困窮は言語に絶していたようである。大正五年、私は早稲田大学の文科の予科に入学した。その年に島崎藤村先生がフランスから帰朝され、私はこの文壇の大家にして郷里の大先輩をたずね、したしくその警駭けいがいに接するようになったが、あくる年の大正六年小川先生に接するや過分の親交と訓化をかたじけなくし、いつしか四十五年というながい歳月をけみして今日におよんだのである。

おもえば私は藤村、未明の両先生から人生と文学に生きる道のきびしさと苦しみを、身をもっておしえられたのであるが、あわれ不才の鈍根どんこん、日暮れなんとして道遠しの感をふかくしている。そしてわがよわいは早や六十六歳——。かつて私は早稲田の英文科に学んでいるとき、師の片上伸教授からいわれたことをわすれない。

——トルストイの文学では「戦争と平和」も「アンナ・カレーニナ」も、ともにすぐれた大作ではあるが、きみ、あの短篇の「壺のアリョーシャ」は、トルストイの偉大な精神と思想が宝石のように結集している作品であるから熟読したまえ。

このおしえをうけた私は、たしかガーネットの英訳だったと記憶

するが、それをさがしもとめて読んだのである。なるほど、それはすばらしい作品で、私は感動し、それからなんべんとなくくり返して、さながらバイブルを読むおもいで愛読したものだ。アリョーシャという素朴な少年のもつ無抵抗に徹した精神と愛情のふかさに、私は圧倒されずにはいられなかった。つづいて私は傑作として有名な「イワンの馬鹿」を読み「人は何によって生くるか」「神は真を見給う」など、トルストイの民話・童話を読みふけるようになった。そんなとき藤村の童話集「ふるさと」が書かれ、私は、郷里木曾に材をもとめて藤村がたんたんとして物語ったその童話集に心がひかれ、童話文学のもつ芸術性のおりにひたって、私はようやく童話の世界に興味と関心をもつようになったのだ。そうなるのも内外の児童文学の書をどんどん読んでみよとした。まず、アンデルセンの「絵のない絵本」から「自叙伝」「即興詩人」にいたるまで、オスカー・ワイルドの「幸福な王子」「ぎくろの家」二巻を読み、ストリンドベリーのもの、タゴールの散文誌集「新月」から少年文学のもの、チェーホフの「ヴァンカ」「少年」「田舎の一日」、キップリングのインドネシアに材をとる民話、さらにステイヴンソンの寓話集、ホーソンの少年文学「ふしぎな壺」と、どれだけ読んだかかぎりがないほどだった。そうして私は世界の児童文学の宝庫の大きくふかいに驚嘆させられ、やがてじぶん自身の世界をひらかなければならぬ——と感じて創作するようになった。それは大正十年春ころからのこと、おもえばここ四十年の歳月が流れたわけである。

この間にあつて小川先生は大正七年の出版「星の世界」の第二童話集から、しだいに童話の創作がおおくなり、あくる年に「金の輪」同十年に有名な「赤い蠅燭と人魚」つづいて「港についた黒んぼ」が出版され、童話文学にうちこむ情熱がいよいよきかんになつて、ついに大正十五年四月、「小川未明選集」六巻が完了とともに早稲田文学に童話宣言なるものを発表して、それまでながくしたんだ小説の筆を絶つて、童話に専心する決意をしめされるにいたつた。これを知つた私の感動もまた大きかつた。これよりきき、大正十三年七月、私は個人雑誌「童話時代」を独力で創刊し、童話にすすむ覚悟を決めたが、貧窮の時代とてそれも三号にてつぶれてしまつた。しかし、その第二号に「門と詩人の話」(のちに「ふるさとの門」と改題した)を発表して世に出るチャンスをつかむことができたのはさいわいであつた。そののち、昭和三年七月、私は千葉省三、水谷まさる、北村寿夫の友人四人で「童話文学」を創刊し、ひたむきにこの道をすすむようになった。しかしこの道はけわしく、いくたびか途方に暮れ、家計になやまされつづけたが、そのつど、小川先生の激励により気力を保つたものだった。

○

ああ、今や、先生この世にいます。

かつては大正、昭和と、児童文学の世界にヒューマニズムの精神とともに、童心主義、ロマンチズムが高調され、いく多のすぐれた美しい作品が世におくられた。秋田雨雀の「太陽と花園」、芥川龍之助の「杜子春」「蜘蛛の糸」、宮沢賢治の「風の又三郎」、宇野

浩二の「春を告げる鳥」、豊島与志雄の「蝗の大旅行」、坪田譲治の「善太と三平」、浜田広介の「椋鳥の夢」——とかぞえればかぎりがない。これらの作品は、おのおの個性ある、独自の風格をもった童話文学で、ただに日本の代表作というばかりでなく、世界の童話文学の名作とくらべてみてけっして損色をみないものとおもわれ

る。

ところが戦後、わが国には民主主義の思想が急流のごとく流れこみ、したがって教育にも政治にも、あらゆる文化に、それが活動するようになり、児童文学の世界にもその思想がいちじるしい反映を見せているのは、けだし当然のことであろう。小説・評論・詩歌に新しい傾向があらわれ、新人が続出するように、児童文学にも新人が顔を出し、戦前においては見られなかったような作品がさかんに世におくられてきた。のみならずエネルギーな長篇がぞくぞくあらわれ、自由な、遠慮はばかりのない評論が、ジャーナリズムの上に躍動してきたことは顕著である。これは文学興隆のためにまことにめでたいことといわなければならない。古来、世界における如何なる思想も、文学も、旧套を脱して新しい創造をいとなむことによつて、人類の文化は向上し発展するものである。

とはいえ、その精神と原理をおもんじながらも、しずかに自己を凝視し、自省し、謙虚素朴なる精神を把持して芸術の世界に生きることをわすれてはならない。それなくしては、たとえ心に玉をいだくといえど、その光を發揮し、人びとの讚仰を受くることはできないであろう。いたずらに高言これを弄し、道をひらいた大先輩の業

績をも難じ、いまや古典の域にある文学作品をかるがるしくないがしろにしてはばからず、むしろそれをもって得々とおもうがごとき評論家もあるが、まことにその心事あわれむのほかはない。ことに、これが児童の魂につらなる児童文学の世界にたずさわるものにあつては、いっそうその感をふかくせざるをえないのである。

「文は人なり」これは明治時代にいわれたことばか、あるいはいつの代からいわれたことばか知らないが、文学作品も評論も、ともにことばから発しこれを表現して文となったものである。したがつてそれはことごとくその人をあらわし、精神を象徴するものといわなければならない。文学の上に愛情と誠実を要求するは自然不変の法則である。いかな新しい文学も、この素朴な精神なくしてはあまねく人に感動をあたえ、社会を清くすることはできない。いわんや純真な児童の魂をはぐくみ、人間形成へのはるかなる希望と夢をもたせることは望むべくもないことであろう。この意義からして、私はさらに、いたずらにマス・コミやジャーナリズムの変調にのみおどる、低俗不純な児童文学を排し、児童の心をあたため、清純な美と愛を、そして健全な新鮮な興味とエンターテイメントをあたえる文学が、おおくの新しい作家によつて生み出されることを心から期待してやまないものである。

——一九六一・五・一九——